

総務常任委員会

(令和元年10月25日)

1. 人口問題・シティプロモーションについて（中長期テーマ）

内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官（総括）の岡朋史氏を参考人として招き、「人口移動と地方創生の動向」について講演いただいた。

主な講演及び質疑の概要は下記のとおり。

〔講演内容〕

①総人口の長期的推移と将来推計について（資料P 1～7）

国立社会保障・人口問題研究所の推計（平成24年1月）によれば、2010年の12,806万人をピークとして、日本の人口は徐々に減少し、2100年にはその約半数となる。合計特殊出生率が2030年に1.8程度、2040年に2.07程度まで上昇すると、長期的には9000万人程度で概ね安定的に推移することになる。高齢化率については2049年以降38%程度で推移するとされているが、合計特殊出生率の上昇があれば、2091年以降27%程度で推移することとなる。

出生数は、昭和22年から同24年までの第1次ベビーブームの際には2,696,638人であったが、平成30年には918,397人と過去最低の出生数を更新し、本年においては90万人を切る予測も出されている。また、労働力人口については、少子高齢化の進行により、若い世代が高齢世代を支えるという社会構造が崩れつつある。

②人口移動の状況について（資料P 8～15）

平成29年では東京圏への転入超過数が13.6万人である一方、名古屋圏、大阪圏、地方圏への転入超過数はそれぞれマイナスとなっていることより、現在も東京一極集中の状況にあることが分かる。東京圏への転入超過数は、20歳から24歳の層、次いで15歳から19歳の層が多くなっており、大学等への進学や就職が東京への転入の一つのきっかけとなっているものと考えられる。

東京圏への転入超過数を男女別に見た場合、リーマンショック・東日本大震災以降は女性が男性を上回っている。また、東京圏からの女性の転出は非常に少なく、女性は転入しても地方へ戻らない傾向が見られる。

東京圏への転入超過数を市町村別に見た場合、仙台市、大阪市、札幌市、名古屋市等、

大都市からの転入が多く、地方都市からは少ない。このことから、各大都市圏においても大都市に人口が集まり（ミニ東京化）、そこからさらに東京圏への転出があることが分かる。

東京圏への転入超過数は、市町村別でも女性が多い傾向にある。女性の4年制大学への進学率が平成29年で49.1%となるなど、女性の高学歴化が進んでおり、高学歴者の就職先が東京をはじめとした大都市に多いことがひとつの背景にある。

③政府の動きについて（資料P16～22）

本年12月に、第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2020年度～2024年度）が閣議決定される予定である。ここでは、「地方へのひと・資金の流れを強化する」ことを新たな視点の一つとしており、この中で、将来的な地方移住にもつながる「関係人口」の創出・拡大に取り組むこととしている。「関係人口」とは、定住に至らないものの、特定の地域に継続的に多様な形で関わる人々のこと（特定地方のファンのようなもの）であり、今後のシティプロモーションは、「関係人口」を生み出すことを目的とする方向性も考えられる。

○関係人口づくりについて

株式会社日本総合研究所の実施したアンケート調査では、地方移住の希望先を選んだ理由について、「自分（または配偶者）の生まれ育った場所だから」（35.3%）、「旅行などでよく行き、気に入った場所だから」（32.0%）との回答が多いなど、地方との縁（関係）が、地方での移住先を決める大きな要因となっていることが分かる。関係人口がひいては定住につながることを示唆するものであると思われる。

政府の取り組みのうち、「関係人口」に関連するものについては、プロフェッショナル人材事業（プロフェッショナル人材と地域企業とのマッチング）、サテライトオフィス・二地域居住の推進、子供の農山漁村体験の充実などがある。都会の子供たちを四日市の自然の良さ等に触れさせることも一つのシティプロモーションの方向性と考えられる。

④若者の地域への愛着醸成に向けて（資料P23～28）

○地域の将来を支える人材育成のための高校改革

15歳から19歳までの東京圏への転入超過は多く、他方で県内の大学に進学する者は少ない傾向にある。実際に若者の減少により、高校の維持が厳しくなっている地域も存在する

ことを踏まえ、高校生に地元を知ってもらうことが重要と考えられる。

「ふるさと教育」など、地域課題の解決を通じた探究的な学びに加え、特に、地域で活躍するカッコいい大人を効果的にPRすることが高校生の心に残り、地域への誇りの醸成や将来的な地域貢献につながると考えている。

シティプロモーションにおいては、四日市を離れた人や四日市に縁のない人を呼び込むことも必要であるが、中高生への効果的な情報発信により地元への定着を促すことも重要な視点である。

○若者の進学先・居住地等の意向について

まち・ひと・しごと創生本部事務局の地方創生ワカモノ調査によれば、下記のような結果が出ている。

・進学先の選定傾向について

地方の高校生の場合、地元残留意思は高校1年生の間は大きな変動なく推移しているが、高校2年生の夏頃より東京志向が強まる傾向にある。他方、東京の高校生の場合、高校1年生の間は地方への転出意思は低く推移しているが、高校2年生になり、やや地方に視野が広がっている。

・進学先選定の背景について

東京進学加速要因は、大学や学部・学科の選択肢の多さ、親の勧め、オープンキャンパスを通じた東京の大学の良さの実感、一人暮らしや都会への憧れ、地方にはそれほどない私立大学の文系学部の存在、仕事の選択肢の多さ等となっている。

地元進学加速要因は、家計の状況や経済的負担への配慮、地元の友人の存在、オープンキャンパスを通じた地元大学の良さの実感、親・家族の存在、一人暮らしへの不安、地元の住みやすさ、研究内容の充実した国公立大学の理系学部の存在、地域コミュニティとの関係等となっている。

・就職・居住場所の意向について

東京進学した地方出身学生については、就職も東京とする意向が高く、その時点では地元に戻る選択は難しい。また、地元進学した大学生についても、地元志向は比較的強いものの、東京志向への揺り戻しも見られる状況である。

しかし、結婚・子育て・介護を考えたとき、どの地域でも地方が良いとの回答が多くを占めており、そのようなライフステージに際して地元への回帰のチャンスが生じることが

分かる。このことから、このタイミングに向けて地元の良さを効果的にPRすることが有効であると考えられる。また、高校生に対する「ふるさと教育」に力を入れることで、地元の良さを印象として持っていただくことで、地元回帰PRが一層説得力のあるものとなると考えられる。

⑤ 地方回帰に向けた広報・コミュニケーションに関して（P 29～30）

広報・コミュニケーションに関し、上記の調査で得られた結果は下記のとおり。

- ・例えば家賃10万円で借りられる物件の広さ等は、自分事化しやすいことから関心が高い。いかに自分事化しやすい情報提供を行うかが、心に刺さるPRにとって重要であると改めて感じた。つまり、魅力的な制度でも自分事として咀嚼し理解できるようにする工夫が必要である。
- ・東京に進学した地方出身者に向けた地方からのメッセージ動画は、我々としては郷愁を誘うことで地域回帰を促すように仕組んだつもりであったが、反対に、「東京で頑張れ」という応援メッセージと感じられる人が多く、思惑とは反対の感じとなった。世代や状況によって感じ方、捉え方が異なるので、PRをする際には、受け手がどのように感じるかよく調査する必要がある。
- ・地方で活躍する若者のインタビューは、具体的に地域にどのように貢献しているのか、具体的なイメージが得られてPRとして効果的だと思われる反面、ある意味、自分とあまりにかけ離れた「超人的」な活躍をしている場合、自分で行うのは到底無理ということで、地方に戻っても自分でできることはあまりないという感想を持つ場合もある。そのあたりの兼ね合いが難しい。

⑥ まとめ

定住人口の維持・増加をシティプロモーションの主眼にした場合、どのような層に訴えかけるかが重要である。進学・就職に際しての東京圏への転入が多いことを踏まえれば、高校生などの若者に地元の良さを効果的に伝えていくことが重要であり、東京圏へ転出した女性が地方へ戻らない傾向があることを踏まえれば、どのようにすれば女性に選んでもらえるまちにするのかを考えていくことが重要であると思う。

また、都会志向のある若者の都会での就職や進学を止めることは難しいが、結婚・子育て・介護等、次のステージにおいて改めて居住地を考える機会がある。ここでいかに地元

の良さをPRするかが重要であり、また、中高生の段階で地元の「かっこよさ」を認識させることで地元回帰のきっかけを作ることができるとも考えられる。

さらに、特定のイベント等と関連付けて継続的に四日市にかかわってもらえる「関係人口」を創出することで、出身者以外にも本市を選択してもらえるきっかけともなりうる。小中学生の農山漁村体験も、子供たちが本市を「第二の故郷」と意識するきっかけとなり、将来の選択肢として捉える可能性も出てくる。このようなことを、四日市に人を呼び込むためのヒントとしてもらいたい。

〔委員からの質疑・意見〕

Q. 東京圏へ転出し、地方へ戻らない女性について、結婚している人が多いのか、どのような就職先が多いのかなどは把握しているか。

A. 申し訳ないが、女性の属性の把握はしていない。

Q. 東京に働く場所が多いことが、女性が地方に戻ってこない第一の要因ではないかと感じる。市では、今後、四日市女子会の開催により、市の魅力の発掘・情報発信をする方向性を打ち出しているが、逆に東京にいる女性に四日市に来てもらうためにはどのようにすればよいか調査することで効果が得られるのではないか。

A. 東京に住む女性等にとって地方の何が魅力であるのか需要調査を行うことは非常に興味深い。女性の活躍という意味では、福井県鯖江市では「鯖江市役所JK課」として、女子高生を中心とした市民協働により地域課題の解決を図ることで、地域に対する愛着醸成につながり、地元就職を志す高校生も増えていると聞いている。

(委員からの意見)

女性の視点も含めて、楽しく、地域に定着してもらいやすい環境を作っていくことが望ましいと感じる。

Q. 確かに結婚・出産を契機に地元に戻ってくる女性が多いとの実感はあるが、東京へ転出した女性はあまり戻ってきていないとの印象である。今後は、一度転出した人が、本市へ再び戻ってくるための施策を考えていく必要がある。その点では、高校2年生のような世代に地元の良さを教育することはこれまでになかった視点であるが、地方でその

ような事例はあるのか。

A. 例えば、長野県飯田市において、高校と市と松本大学の3者がパートナーシップを締結し、高校生が地域課題を主体的に考える「地域人教育」を行っている。

(委員からの意見)

本市に市立高校はないため、アプローチ方法について課題がある。高校生議会やシティ・ミーティングの見直しを通じて高校生にアプローチすることも手法の一つと考える。カリキュラムの中に組み込むことは容易ではないが、全校集会等の場を活用することもできるのではないかと考える。

Q. リニアの開通により、2027年には東京・四日市の移動時間が大幅に短くなる。リニアの開通により東京一極集中にどのような影響があると考えられるか。

A. なかなか難しい問題であり、お答えするのは難しいが、一般論として、リニア開通により四日市において仕事や生活のあり方がどのように変わっていくかについては、時間距離の短縮による機会費用の削減と、リニアの利用増による運賃等のコストの増加との兼ね合いにかかってくると思う。

Q. 40歳頃になり、自然も多く、一定の便利さもあり、名古屋にも比較的近いという四日市の良さによりようやく気付いた。10代、20代ではおそらくそのような思いに至ることは少なく、大学等も少ない状況を見れば、今以上に人口を増やさなくてもよいという発想の転換も必要ではないかと感じている。人口増に向けたPRを行うよりも、むしろ今住んでいる人たちが住みやすいと思えるまちをつくり、人が出ていかないようにすることが先決であると考えているが、所感はあるか。

A. そのような見解もありうると思うが、地元の人を呼び込むためのPRも十分意味があると考えている。要は、何を目的としてPRするかにかかってくると思う。

Q. 東京一極集中を是正しなければ根本的な問題は変わらない。海外では、大企業の本社が田舎にある場合も多いことから、企業本社の東京への集中を是正するという施策は考えているか。

A. 地方への分散という意味では、本社機能を地方に移した場合に税制での優遇が受けら

れる制度を設けており、現在、その拡充ができないか税当局と議論しているところである。

Q. 現在、最低賃金が地域ごとに異なる状況であるが、全国統一の最低賃金を導入し、どこで働いても同程度の賃金が得られるような仕組みが必要と考えるが、どうか。

A. 最低賃金制度については、他の部局の所掌であるため、申し訳ないがお答えする地検はない。

(委員からの意見)

地域間の賃金格差も、地方への人の流れを止める要因になっているのではないかと考える。

[理事者からの質疑・意見]

Q. 株式会社日本総合研究所の地方移住者へのアンケートでは、地方との縁（関係）が、地方での移住先を決める大きな要因となっていることが分かるが、移住に向け、本市の魅力伝えるためには様々な政策面でのアピールが必要と考えている。アンケートの中には、地方移住の希望先を選んだ理由として、自治体の政策も選択肢に入っていたのか。

A. アンケートは、関係人口が地方移住につながりやすいことを示す実例として挙げたものであり、そこまで細かい選択肢はなかったと思う。

(理事者からの意見)

中学生までの世代はある程度市でかかわりを持つことができるが、実際に社会に出る前段階に当たる高校生・大学生については、直接的なかかわり合いがないのが現実である。特に進学校については難しいが、何らかの接点を持つ方法を考えていく必要がある。四日市から旅立つ前段階の若者に、地元のことを知ってもらうことが重要であることを再認識した。

15 : 16 休憩

15 : 26 再開

○ 荻須智之委員長

では、もう時間になりましたので、本日の調査のまとめにつきましては、正副で整理させていただきます。

第1回目の議論において、本市の世代別人口動態や近隣市町の人口動態などについて確認したいとの意見がありましたので、第3回ではこれを確認するとともに、第1回目の議論や今回の岡参事官からの講演を踏まえ、引き続き、今後の人口政策の考え方、シティプロモーションの方向性について議論していきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

○ 荻須智之委員長

ご同意いただいたということで、そのようにさせていただきます。

次に、本来の予定にはありませんでしたが、次の事項について総務部より報告がございますので、内田部長から報告をいただきます。

では、部長お願いします。

○ 内田総務部長

本日は、大変貴重な時間を頂戴いたしまして、ありがとうございます。

また、報告の案件、説明する前に、16日に記者発表させていただきました職員が業務に関係なく個人情報を開覧したということにつきまして、改めて深くおわび申し上げます。

また、本日報告させていただく2件につきましては、1件は、これもおわびする話になっておりまして、もう一件は税務署からの指摘で、市としては頑張って戦っていくというものになっていますけれども、順次説明させていただきますのでよろしくお願いいたします。

○ 荻須智之委員長

では、本件についての資料説明を求めます。

お願いします。

(発言する者あり)

○ 内田総務部長

紙で用意させていただきましたが。

○ 荻須智之委員長

紙ベースですか。

それじゃ、ちょっとお待ちください。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

いや、回収せなあかんものではないです。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

ありがとうございます。

では、資料説明を求めます。

内田部長、お願いします。

○ 内田総務部長

総務部長の内田でございます。

まず、今、お配りさせていただいた資料、3枚ものでございますけれども、今回、四日市税務署が市立四日市病院に対して税務署調査に入ったということで、1ページ目の1番の四角、囲んでございます2点、指摘を受けてございます。

1点目は、ちょっと長々書いてございますけれども、我々公務員は、職員の給料から月々源泉徴収をして税務署に納めておりますけれども、毎年1月のお給料を出す前に、扶養控除等申告書を職員から徴収しておれば、月々のお給料は源泉徴収というのは甲欄という税額を適用されるわけですが、本市の場合、前の年の年末調整に職員から扶養控

除等申告書をとっており、それを翌年の税額決定のために流用しておったと。前年の年末調整のために使う申告書を翌年の月々から給料を引くための税額を決めるための申告書にも流用しておったということがありまして、それが指摘されております。

本来ですと、1月のお給料の前に全員からこの申告書をとって、それから、11月ごろ、ちょうど今ぐらいになりますかね、年末調整用に改めて変更があった分だけとというのがルールになっておりますけれども、四日市の場合はこの時期に全員からとって取りましたもので、それを翌年分にも流用しておったというのが現状でございます。

今回、市立病院、その指摘を受けまして、ことしの源泉徴収の税額は、年の初めに全員から扶養控除申告書を、ことし用としてとっておらず、去年のを流用しておるということですので、そういう場合は、甲欄ではなくて乙欄の税額を適用すべしと。乙欄といいますのは、非常に甲欄よりも税額としては高額になりまして、税務署としては、その差を支払いなさいということでございます。

ただ、現職については、この1月の当初に扶養控除等申告書を今からでもとることができるけれども、退職された方はそれもできないので、今回は退職した職員について適用するということございまして、本年1月から、この病院の場合ですと6月までになっていますけれども、退職された方に対して、まず甲欄乙欄の差額を税務署に納付せよということでございます。

それから、2点目は、病院事業管理者の退職手当、4年任期の後、退職手当を支給し、その後、現在の院長は再任をされておるわけですが、その間に払われた退職手当については、再任前と再任後の勤務内容が変わっていない限り給与扱いにすると。いわゆる、我々と同じように賞与扱いとして税金を計算すべしというのが2点目の指摘でございます。

これは、退職所得に比べて給与所得になりますと税額はその分ふえてしまいますので、その差分を払いなさいというのが2点目の指摘でございます。

今、私、申し上げた内容は、囲みの下にも、①、②それぞれ書いておりますけれども、一つ目は、事務的に、前の年に年末調整の前に全員からとっておった申告書を翌年の分としても使っておったという指摘があって、それは税法上おかしいということで、ことしの分、対象者の分については、甲覧、乙欄の差額は一旦市のほうが税務署に納めると。

ちょっとページ、飛びますが、3枚目を見ていただきますと、ポンチ絵を描いてございますけれども、四日市市から一旦税務署のほうに、その甲欄、乙欄の差額を払うということでございますが、その後、退職者本人から四日市に、その差額分をお支払いいただいて、

その支払った金額を記入した源泉徴収票を対象者のほうに交付し、退職者は、それを持って確定申告をしていただきますと、甲欄、乙欄の差額を全額還付を受けられるということにはなりません。ですから、税額としては、最終的には、市のほうに一旦負担していただく職員についても、確定申告によって税務署から返ってくるという仕組みですので、行ってこいの税額の動きになるんですけど、ただ、①のこの甲欄、乙欄の差額を本市が税務署に納めるときには、不納付加算金と、それから延滞金が加算されると、この分は市費として持ち出しになるということでございます。

ページ、1ページに戻っていただいて、病院については、中央に書いてございますけれども、今回は、医師の方の退職もでございますので、本税としては2300万円余の支払いと。それに伴って不納付加算金が10%つきますので230万円余と。延滞金、一応10月末納付を予定しておりますけど、それは103万円余となっております。

また、2点目の病院事業管理者については、条例によって任期ごとに支給するとなっております。ございまして、本来ですと、本市としてはこれは退職手当というふうに認識しておるところでございますが、ただ税務署から指摘を受けて、一度この点については、下から4行目、5行目に書いてございますように、10月の11日に病院から税務署のほうに申述書を提出させていただきます。なかなか納得できやんということを申し述べさせていただきます。

ただ決着がつくまでの間にどんどん延滞金が加算するということもあって、一旦、一番下に書いてございますように、指摘の納付分については、本税並びに不納付加算税と、それから、延滞金、10月末予定ですけれども、こちらは納付しつつ、この点については、今後も四日市税務署と争っていきたいと、このように考えております。

1点目のほうは、本市のほうが事務の軽減という観点で税法上の解釈を勝手に解釈して前年の分を翌年に流用しておったという非常に軽率なことが原因になっておりまして、これは本当にまことに申しわけなく思っております。今後、事務処理については、税法にものをもって適正にやっていく所存でございます。

それから、めくっていただいて2ページは、この1点目のご指摘は市立病院は指摘受けておりますけれども、そうは申しまして、もう、上下水道局並びに市長部局等々どうやということで改めて調査しまして、病院と同じやり方をしておったということでございます。こちらは税務署から指摘は受けていませんけれども、本年1月から9月末までに退職された方については同様に、もうこれは自主的に税務署のほうに納付をしたいというものでございます。

①②③、市長部局、教育委員会、消防、合計しますと、その下、退職者82人で、本税が1100万円余と、加算税は自主納付になりますので、先ほどは10%でしたけれども、自主的に納付する場合は5%ということですので、5%の金額と。それから、10月末想定で延滞金を計算してございます。

上下水道局は、同じく4人となってございまして、記載のとおりということでございます。

今回、ご説明に上がったのは、この金額、なかなか補正予算をお願いしないと執行できやん金額になってございまして、現在その補正予算を上程させていただく予定ですが、議決を待っておりますとそれまでの延滞金が加算しますので、一旦、既決のほうから、それぞれ3番に書いてございますように、早期に税務署に納付をさせていただき、後に、企業会計ともども補正予算をお願いしたいと考えてございます。

最後に、そのスケジュールにつきましては、現在、もう正副議長のほうには現状報告させていただき、既決予算から大きな額を執行するということから、全議員にあらかじめ説明した上で、この事後処理は進めていけというご指摘もございまして、本日もご説明させていただいております。

その後、11月定例会議会において、関連予算、補正予算を上程させていただき、議案聴取会の折には、改めて全議員の皆様におわびとご説明を申し上げたいと、このように思っております。

以上です。

○ 萩須智之委員長

ありがとうございます。

説明はお聞き及びのとおりです。

ご質疑がございましたらご発言願います。

竹野委員、どうぞ。

○ 竹野兼主委員

この右のところについてさ、病院事業管理者、同じように市長もさ、そういう形で退職金を受け取っているといつて、前市長なんかは同じような形でやっておるんじゃないかなと思われるんやけど、そういう退職金が出るという部分のところのところというのは、関

連しておるのは、市長、病院長、それから上下水道事業管理者とか、そういうところぐらいだけなの。その部分のところについては、もう対応も、何らか、その職員の部分のところについては、前年のやつを使っておったから支払うよという話になっておるけど、それ以外の5年を経っていないような、だから、例えば市長なんかは、そういう問題が出てくる可能性があるのかなと思って聞いておったけど、その辺は今の認識はどうなの。

○ 内田総務部長

今回、税務署の指摘は、病院事業管理者だけになってございまして、今おっしゃられた特別職、市長、副市長等々、あるいは教育長も含めて、そちらに指摘するという事は税務署、今、考えておらんという確認はとっております。

ただ、理屈的にはあり得る話ですけれども、病院事業管理者と違うのは、やっぱり、選挙あるいは議会の承認を経て来る人事議案として提案する、でも、病院事業管理者は、市長が任命して、議会の承認も何もなく決まってくるので、そういった意味では、ちょっとほかの特別職とは就任するときの手続きが違うということで、我々としては、あらかじめその差分を計算して税務署に納付しておこうという考えは、今、持っておりません。

○ 樋口博己委員

その1のほうの対応ですけど、これ、他市町は、ちゃんとこういう年末調整は年末調整、年明けてから、ちょっと現状の把握をしていたけれども、四日市だけがしていなかったということですか。

○ 内田総務部長

ちょっと他市町の状況まではちょっと私も調べておりませんが、四日市のやり方は、極めて四日市だけに近いと思います。本来は、1月のお給料が出る前に全員からとって、その年の年末調整の直前に異動があった分だけとればいい、これはルールなんですけれども、四日市市の場合は、頭で全員とり、年末調整のときにも本当は全員とっていたんです。全員とっているんやったらもう翌年の分に流用しちゃえという簡単な発想が出てきておるので、年末調整も全員からとっておったというのは四日市、多分異動分だけとればいいんですけれども、なかなかそこがいろいろ漏れて、年末調整したのにまた年末再調整もするような事務が非常に煩雑になっておったということで、年末調整前にも全員からとろうと、

これはもう事務的にやっておったんですけど、それはちょっと、どうせすぐに翌年の分をとらんならんのやったら、それ、そのまま使ったらいいやんみたいなちょっと軽はずみな考えで運用してきたというので、余り、聞くところによると、そのときに翌年分も一緒にとっておるとい自治体が多いと思います。

○ 樋口博己委員

そうすると、これ、今回の場合は市立病院ですけど、本庁の消防局の職員も、そういうふうにするということですよ。ちなみに、我々議員も年末調整のときに現状確認されますけど、年明けて確認されたことはないんですけども、その辺はどうなんですか。事務局に聞かんとあかんかな。

○ 内田総務部長

議会事務局は、きちっとやっていただいております。

○ 山路議会事務局次長兼議事課長

確認をしましたら、二度とおるとい形。

○ 内田総務部長

我々と違って、甲欄、乙欄、我々はほとんど甲欄ですけど、乙欄の方もやっぱり、ほら、おると思いますし、きちっととらんと適用する税額がやっぱり違いますので、それは、きちっととられておるといふう聞いておりますけど。

○ 樋口博己委員

清水次長が大丈夫と言われるんやったら、それは信用しておきます。

○ 森川 慎委員

この指摘されたところは、いつぐらいからそういうふうにされていたのか、確認できていますか。

○ 荻須智之委員長

1 についてですね。

○ 森川 慎委員

1 ですね。

○ 内田総務部長

いろいろ調べさせていただいて、平成18年ごろからそういった運用をしておったと聞いております。

○ 森川 慎委員

これは、遡って同じことを、追加納税とか法的に迫られることはないんですか。どこまで。

○ 荻須智之委員長

時効等、何年間追徴されるかということですね。

○ 森川 慎委員

も含めて、平成18年、平成17年からやっておったんだったら、10年以上してしまったわけで、どこまで、また同じようなことが出てくるんじゃないかなって懸念するんですけど。

○ 内田総務部長

この点については、私ももう四日市税務署に出向いて確認しましたが、本来ですと、現職、退職者関係なく差額を払えというところもあるんですけども、税務署も名古屋国税局の判断もあって、退職者だけと。それから、過去に遡る考えは、今はお持ちでないということでしたし、多分ちょっとこれは私の私見ですけど、過去の分は、もう年末調整で精算されていますので、それをもう一遍年末調整されていない状態に戻して差額を請求するというところまで非常に考えにくいなと自分自身では思っております。

○ 森川 慎委員

手間がかかって大変やというのはわかるんですけど、法的には問題ないんですね、それ

でその税務署なりがそういう判断をしたということであれば、余り。

○ 内田総務部長

今回の件については、税務署調査で指摘された点について応じていくということで問題ないと思っております。

○ 森川 慎委員

応じていく。

そうすると、この2ページ目のところは別に応じやんでもええという話ですか。にはならないんですか。それはまた違う。その判断の違いというか。

○ 内田総務部長

1点目は、病院が指摘されていますので、当然病院だけ応じたらええという考えもあるんですけど、当然我々も、関連する議案も上程する中で、一般市民への説明責任を果たすときに、どうしてもほかはええんかという話は当然つくし、四日市全体でちゃんとやっているのかという話には応えていく必要があって、これはやっぱり自主的に応じるべきやと判断させていただきました。

○ 森川 慎委員

そうすると、やっぱり遡ってという話にもまたなってくるのと違いますか。この年だけのじゃないよねという話に、もうそういう判断したんやったらなるんじゃないかなということをおもうんですが、どこまで責任追及できるのかわからんけど。

○ 内田総務部長

病院のご指摘は、ことしの退職者分だけ指摘するということでしたので、それはやっぱり、特にそれをどうのこうのという考えは持っていません。その指摘に対して、病院以外の部局は、同じレベルで自主的に応じていきたいという考えで今回は整理させていただいております。

○ 森川 慎委員

税務署の指摘に準じた対応をするという考え方ですね。わかりました。ありがとうございます。

○ 荻須智之委員長

ほか、いかがでしょうか。よろしいですか。

(なし)

○ 荻須智之委員長

別段ご質疑もこれでありませぬので、本件はこの程度といたします。

理事者の方はご退席ください。お疲れさまでした。

○ 内田総務部長

ご迷惑かけて、申しわけございません。

○ 荻須智之委員長

それでは、事項の3、議会報告会、シティ・ミーティングで出された意見についてに移らせていただきます。

資料は、タブレットに配信されております。休会中の総務常任委員会の02議会報告会、シティ・ミーティングで出された意見（案）でございます。

これについては、説明してもらわないかな。

では、まとめたもの、この資料について事務局から説明いたします。

○ 笠井議会事務局主事

事務局、笠井です。済みません、説明させていただきます。

資料のほう、よろしいでしょうか。

まず、議会報告会のほうでは4件の意見が出されております。

1点目に、AEDの訓練についてのご意見。2点目から4点目につきましては、緊急輸送道路に係る対策に関する意見が出されております。いずれも、③その他の意見として整理しております。

なお、2点目の意見につきましては、環状1号線の早期の整備を求めのご意見でございます。回答の中でもご発言をいただいておりますが、所管の都市・環境常任委員会へ申し伝えることと整理しております。

次に、シティ・ミーティングで出された意見についてです。

今回はシティプロモーションについて、「市外から人を呼び込むため、あなたならどうしますか」というタイトルで、2グループに分かれて意見交換を行っていただきました。

それぞれのグループで出された意見につきまして、大きく四日市市の魅力に関する意見、四日市市を訪れたいまちとすることに関する意見、四日市市を住みたいまちとすることに関する意見の三つに分類しております。

なお、Bグループの意見に関してのみ、その他という分類を設けております。シティ・ミーティングのテーマ自体が委員会の中長期テーマに関する設定でございますので、各グループで出された意見は、いずれも常任委員会として協議すべき意見ということで分類をさせていただきます。

以上でございます。

○ 萩須智之委員長

ありがとうございます。

正副としては、先ほどの説明にあったとおり、議会運営委員会に報告することとしたいと考えておりますが、ご意見、補足等がありましたらお願いします。いかがでしょうか。よろしいですか。

(なし)

○ 萩須智之委員長

では、これ、案を正式な意見として報告させていただきます。ということでよろしいですかね。

よろしいですか。

(異議なし)

○ 萩須智之委員長

ありがとうございます。

それでは、この内容にて議会運営委員会へ報告させていただきます。

それから、行政視察につきまして、仮日程が、以前決めさせていただきました令和2年1月28日から30日、火曜日から木曜日でございますが、現在、行くかどうか、まだ全日程を使い切るかどうかが決まっておりませんが、仮で日程を確保している状態でございます。もし、視察を行うのであれば、この時期くらいから依頼をかける——今からですね——必要があると思っております。現状、特に中長期テーマに基づく事例研究等は行っておりませんが、前回、森川委員からご提案のあった明石市も含めて、近年人口の増加に成功している自治体の売り出し方について、または、定住人口の増加を狙いとして特徴的なプロモーションを行っている例などを中心に選定を行ってはどうかと考えておりますが、いかがでしょうか。

○ 森川 慎委員

余り売り出しじゃなくて、何でふえているかというところを知りたいと思うんですけど、今の説明やと、委員長の。シティプロモーションに成功しておるところもあれば、それはいいかもしれませんが。

○ 萩須智之委員長

理由について……。

○ 森川 慎委員

人口がどうしてふえているのかなというところをちょっと、それがもしも宣伝が原因なんやったら、それはそれで結構ですけども、ふえたことを売り出すじゃなくて、何でふえているのかなということ。

○ 萩須智之委員長

了解しました。そういう観点でということで進めます。

ほか、いかがでしょうか。

樋口委員、どうぞ。

○ 樋口博己委員

どうかわからんですけど、きょう、高校生のアプローチという話があって、資料あれば送ってもらおうということなんですけど、高校生に限定するとちょっとあれかもわかりませんが、何かそういう地元学習とか何かそういうの、森川さんも言うていましたけど、四日市出身の人が、どこか出て戻ってきてもらっている施策、何かそんなのでいい事例があればと思います。

○ 萩須智之委員長

そういう先進事例のある都市を探すということですね。Uターンに力を入れ、もしくは、成功しているという事例ですね。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

竹野委員、どうぞ。

○ 竹野兼主委員

この前、一日、視察、行政視察行ったので、一泊二日とって。

○ 萩須智之委員長

うん……。

○ 竹野兼主委員

可児市、可児市。

(発言する者あり)

○ 竹野兼主委員

岐阜。

○ 萩須智之委員長

岐阜なんですわ。行っていません。

○ 竹野兼主委員

そうやったな。

メンバー、よう似ておるもんで、あれ、行ったのと違う、一日で。違ったわ。

○ 萩須智之委員長

オブザーバーでした。

森川委員、どうぞ。

○ 森川 慎委員

この行政視察って、えてして何かどこかわざわざ遠いところへ行こうとしたりするやないですか。九州へ行こうとか、東北へ行こうとか。ぜひ東海地方でもきっとそういうところはあろうと思うんで、そういうところも一つ、ええところがあったら候補に入れていただきたいと思いますし、その場所ありきじゃなくて、まちありきでね。

(発言する者あり)

○ 森川 慎委員

そう、そう、そう。西へ行こう、東へ行こうみたいな話を、えてしてされがちやもんで。ぜひ、そういう視察にしていきたいと思います。

○ 萩須智之委員長

はい。

○ 森川 慎委員

なかったら、しょうがないですけどね。

○ 萩須智之委員長

ええ。同格市。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

飯田は、車が早いです。

そうですね。飯田市も、東海圏に入れてもいいぐらい近いといえば近いんですけども、東海圏ですと、同規模は、春日井、豊橋、一宮あたりですか。その辺でというと、春日井は、もうほぼ名古屋市内並みに近過ぎるのと、豊橋は、割とオリジナリティーに満ちたことやっていますね。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

失敗しているところは。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

あえて見に来てくれとは言わんやろうで。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

今、同格市とちょっと言ったのは、豊橋は港を持っていて、名古屋港ともちょっと違うというところで似ているんですよね。37万人で。見ていると、割とね、行政に切れ者があるような感じで、小学校のプールを200億円で全部作りかえるとかかるから、もう民間委託しようって言い出したのも、ここ、早かったんですけど。それと、港がメルセデス・ベンツとフォルクスワーゲンの日本の積み上げ港、荷揚げ港なんですね。これ、物すごい

もうかっておる人がいて、そういうので、仕事もある程度持ってきているんじゃないかなというのがありますね。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

そうですね、似てはおるんですけどね。立地が、1時間以内ぐらいで、名古屋へ出れて、もしくは。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

こだまですのね。ああいうところは、ちょっと似ています。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

似たような形のところは、みんな減っておるか。

○ 竹野兼主委員

大体、上がってきておるところというのを探すほうが難しいやんか。

○ 荻須智之委員長

そら、もう、上がっていつておるのは東京近辺で、それこそ流山市なんかが、つくばエクスプレスの駅ができたら一遍にふえたとかですの。

○ 竹野兼主委員

そういうことやな。要するに、都内に。

○ 荻須智之委員長

もう30分以内で。

都心に、1時間どころか30分以内ぐらいで行けるようになったとかね。

○ 竹野兼主委員

それをふやそうとしている事業の中で、ちょっと特徴があるとか、そういうのは、さっき言っておいたみたいに国のほうもしっかりと知っている状況にあると思うもので、そのところを聞くことは、やっぱり現場で聞くことって大分違うと思うので。

○ 萩須智之委員長

流山は、つくばエクスプレスの車内のつり広告に、母になるなら流山とか父になるなら流山とか、子育て施策で、もうターゲティングしてということやったんですね。30代前半の、ちょっとええ仕事についておる夫婦で、教育に熱心でこだわりがあるとかというのを、もう狙い定めてやったとかで、いい例なんですよ。いい例なんやけど、東京に近過ぎるので、ちょっと違うかな。名古屋をミニ東京に見立てたらええかなという感じはあるんですけどね。

○ 竹野兼主委員

大阪でもええ。

○ 萩須智之委員長

ですね。

○ 竹野兼主委員

じゃ、明石。

○ 萩須智之委員長

明石は、それなんですよね。山陽新幹線では早いので。そこら辺で調べていく。明石と流山、両方行くことはできないんですけどね。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

無理です。

ふえておるところは少ないと思います。もう明らかに大都市圏のコミュータータウンとかベッドタウンがふえるんですけど、名張の桔梗が丘なんかを見ていてもね、30年後見ると悲惨な状態になっているんで、余り勉強にならないですね。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

そうですね。

もう、えらいことになっていますわね、年寄り抱えて。名張市は、もう今後大変ですから。ちょうど、そうですね、30年前ぐらいはすごく土地も高くてハイセンスな桔梗が丘ということやったんですけど、今、老人のまちだって。大変ですわね。余りそういう、もう本当ベッドタウンというようなところは、余りね。もう必然的にふえるというようなところは、それほど努力せんでもふえておるような感じもあって。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

ないんな。

○ 竹野兼主委員

だから、今言うたみたいにな取り組みで、なかなか興味深いなというところを探してくれたらいいんと違うの。それが、ひょっとしたら、四日市に合うかもしれんし。

○ 萩須智之委員長

逆に、このキオクシアで本社機能ということやもんですから、この関連会社も今後集まるんですよ、ある程度。もう既にその傾向はあるんですけど、これでふえたとすると、四日市が珍しい成功例になってくるかわかんないですけどね。職場もあってというのでね。

半導体産業なんでね、この次の一手を打てるかどうかですね。

○ 樋口博己委員

やっぱり四日市は、戻ってきてもらう、ちゃんと戻ってきてもらうというのがないような。岡さんも言っとったけど、たとえある程度の年になって、やっぱり地元のがいいよなというので戻ってくる、そのインセンティブを、ちょっと手助けをやっぱりせなあかんと思いますね。なかなか四日市によそから来るといのは、旦那か奥さんが、どっちな四日市出身で、それにつられて来るといのか。

○ 萩須智之委員長

多いですね。

○ 樋口博己委員

女につれられて行くことが多いですよ。男がついてくるというのは、余り。

○ 竹野兼主委員

うちの地区も、そんなんやで。

○ 樋口博己委員

そうですね。

○ 竹野兼主委員

女の子が嫁に行つて、あんたが帰つておいでといつて、一緒に帰ってくる。

○ 萩須智之委員長

マスオさん、連れて帰ってくるんですね。

○ 竹野兼主委員

物すごく多いといのは、僕らも聞いておる。

○ 樋口博己委員

だから、やっぱり地元出身の女性を連れ戻す政策を。

○ 萩須智之委員長

やっぱり女性に的を絞っているというのが大きいかな。

○ 豊田祥司副委員長

女性の起業を育てるとかって、そういう事業をやっているのは。

○ 竹野兼主委員

女性起業家な。そういう事業で、見ておるところはええんやけど、それが本当に機能しておるかとかというだけ。だから、それを機能させておるところがもしあるのやったら、何で四日市には、それが育たんのか、足りやんのかというのはあるな。

○ 樋口博己委員

三重県全体としては、女性の活躍社会が、めっちゃおくれておるんですよ。

○ 萩須智之委員長

田舎ですからね、基本。

○ 樋口博己委員

三重県というのは、女性が働かなくても何とかなる県なんですよ。

○ 萩須智之委員長

昔ながらの田舎ということですよ。

○ 樋口博己委員

それでも、北勢、四日市でもやっぱりそういう傾向あるので、そんなに、女性に四日市戻って起業してもらおうというのは、余り効果ないような気が。

○ 荻須智之委員長

女性向きの仕事がまだ足りないんでしょうね。

○ 竹野兼主委員

これさ、速効性の話もあるかもしれんけど、将来に向けての話やで、正副一任で。

○ 荻須智之委員長

そこへ飛んでくるんですか。

○ 竹野兼主委員

今の意見を聞いてもらった中で、正副が、これやったらどうやろうという。

○ 森川 慎委員

三重県内の自治体とかって、どうなんですかね。

○ 荻須智之委員長

四日市は、もう三重県中から労働力を奪っていますから。

○ 竹野兼主委員

四日市に来るんやもんな、人が。

○ 荻須智之委員長

もう、三重県中の名字が四日市にありますんで。

(発言する者あり)

○ 樋口博己委員

だから、四日市で三重県の南を、もう一回食いとめて。

○ 荻須智之委員長

食いとめています。

ここまでねという感じ。

○ 森川 慎委員

四日市におったら、戻ってもらう可能性もあります。

○ 樋口博己委員

そう、そう、そう、そう。四日市でとめやないかんですよ。

○ 竹野兼主委員

そやで、どこやったっけ、伊勢志摩のほう、住んでくれたらお金を渡しまっせ、土地は。

○ 荻須智之委員長

鳥羽市ね、鳥羽市。てっとり早かったですね、あれ。

○ 竹野兼主委員

あれ、近鉄の電車にあって、土地はどんなんやろうとかさ、家あげるよとか何か書いてあったよね。

(発言する者あり)

○ 荻須智之委員長

そうですね、女性の仕事、女性が仕事をしやすいというのは、一つ、きょう、新しい観点で見ていかなあかんというのは勉強になりましたのでね、そういう。

○ 竹野兼主委員

シティプロモーションも、そののところ、視点を持ってやろうとしているのと違うの。それをどうやって評価していくかというのがあるんやろうなど。

○ 荻須智之委員長

考慮させていただきます。

○ 竹野兼主委員

正副委員長、一任で。

(異議なし)

○ 萩須智之委員長

ありがとうございます。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

じゃ、考えさせていただきますので。

○ 竹野兼主委員

一応やるんやね。

○ 萩須智之委員長

やる……。

○ 笠井議会事務局主事

済みません、ちょっと委員長から言っていたかどうかと聞いていたんですけども、ちょっと行程を組む中で、さっき森川委員からおっしゃられましたけど、例えば、近いところで組もうと思うと、それなりにやっぱり遠いところと組み合わせていかないと、例えば、泊がつかないとか行ってすぐ戻ってこなあかんとか、そういうことが出てくるんです。例えば、その行程を組む中で、やっぱり難しいというようであれば、例えば日帰り行程であるとか一泊二日の行程で組ませていただくとか、そういったところもご了承いただけましたら、そういった、例えば近くでとかそういったこともできるのかなと思います。

○ 森川 慎委員

日帰りでもいいし、一泊二日でもいいし。

調べるものがあるから行くという視察にさせていただきたいなど。

○ 萩須智之委員長

はい。

○ 竹野兼主委員

この分だと、基本的には2年間やらなあかんのやで。

○ 萩須智之委員長

はい。

○ 竹野兼主委員

ちょうど、今、言われるみたいに、確かに、調査するべきものというけど、コミュニケーションをとるという意味合いのところとか、1年目は、そういう意味合いのところも含めてなのかなと思っています。2年目のところについては、本当に調査するべきものがあるってというような状況がベストなのと違うかなというのは思っていました。

(発言する者あり)

○ 萩須智之委員長

では、そうですね、言わなあかんね。

視察行程を組む中では、人口政策やシティプロモーションのテーマのみではうまく組めないというふうには、ちょっと議論してきておるんですが、今、笠井事務局員が言われたように、日帰りになって、もう近いところは、もう日帰りになっちゃうと思いますので、もしくは東京へ行く途中に寄って、その足で移動かということになってくると思います。一応一任していただきましたので、決まり次第、皆様には連絡させていただくようにします。

○ 森川 慎委員

さっきの講演の中から観点を思ったんですが、ミニ東京じゃないまちを目指しているようなまちみたいな、そんなのいいですかね、自治体。何でもあるというんじゃないで、これだけに特化しようみたいな、そういうまちづくりを進めておるとか、何かそんなのってないですかね。

○ 萩須智之委員長

その近隣の巨大都市を当てにせずということですね。

○ 森川 慎委員

というか、そのまちに何でもあるんじゃないで、こういうところは素晴らしいというだけで特化していくような、そんなまちづくりしておるようなところとか、さっきの講演で、ミニ東京に行くんやったら、みんな東京へ行ってしまおうという話やったもので、何か、そんな観点も。

○ 樋口博己委員

どこかのまちかどこかが、うちには何も無いって言っているまちもありましたね。

○ 萩須智之委員長

それもありかな。

○ 森川 慎委員

そういうのもありかもしれないね、本当に本当に。

(発言する者あり)

○ 竹野兼主委員

その、そういう小さなところの状況であれば、四日市のところに、30万人で、ある程度の人や物があるのに、それを見本にして何か建設的なこと。

○ 樋口博己委員

いやいや、そうじゃなくて、何かそういう一点突破どりにしておるといふ施策が、どこかないかという話でしょう。

○ 森川 慎委員

東京とか、名古屋とか、そういう大都市みたいなまちづくりって、結構高度成長期のときは、ずっといろんな自治体と同じことしてきたと思うんですよ。だけど、それが、やっぱり違うんじゃないかということで、やっぱり東京、さっきのそれこそ講演の中で、ちっちゃい東京へ行くなら、みんな東京へ行ってしまふ、こういう流れがあるという話で。

○ 萩須智之委員長

そういうのから、差別化するなら。

○ 森川 慎委員

そういう自治体みたいなのを、どこかないかなと思って。

○ 萩須智之委員長

そうですね、四日市も、どっちかというところ、かなり差別化されているほうで、石油重化学工業と半導体産業だけにもたれているという点では、ここにはメディア産業とかそういうのはないですから、東京になり得ないですよ。もう名古屋へ行くと、中日新聞の本社があつたりとかして、もう既に変わるという点では、もう、その、札幌、仙台、東京、神奈川、名古屋、大阪、北九州ですか、を除いたところで、そこから離れたところで自己完結的にやれているところということですか。

○ 森川 慎委員

いや。

○ 萩須智之委員長

何か売りがないことには人は集まりませんし、それなりの企業もあるということでしょうけど。

○ 樋口博己委員

例えば、久留米市とかね、福岡県の福岡市があつて、ちょっと離れた30kmちょっとぐらいにあつて、あそこはブリジストンの企業が……。

○ 萩須智之委員長

そうです、そうです。

○ 樋口博己委員

海や港はないですけど。

○ 萩須智之委員長

内陸部ですね。

○ 樋口博己委員

あと、四日市によく似たまちで、ちょっともう具体的に何か特化したものがあるかどうか、わからんけど。

○ 森川 慎委員

よく似たまち、訪れてみるというもの。

○ 樋口博己委員

うちはこういう土地やけど、あんたのところはそれがないんやなというような。

○ 萩須智之委員長

久留米は、福岡からの距離はそこそこあるけど、まだ近いほうでということで、四日市、名古屋にも似たところがありますね。

もともと、割とね、鉄鋼なんかでも、昔から中小企業は、ええのがようけあるんですわ。あと、久留米医大という大学も古い私学ですがあつて、久留米、一回ちょっと当たってみます。これで人口増やったら一番いいわけですけどね。

○ 竹野兼主委員

今もさ、そのまちづくりの話なんか、正副に一任したら、どうや。もう、話、切りなくなるでさ、一旦やめたらどうかなと思う反面、総務委員会で、まちづくりだけじゃなくて、例えば、政策の部分のところの部分でさ、将来的にもという、まちづくり、まちづくりという形で2年間見てくるんやけど、その次の先を見据えた部分のところ、総務が見ていかんならんやろうなと思うところの部分も正副のほうで提案してもら。だから、そのまちだけの話だけ見ておったら、1カ所しかないよねという話ではあかんと違うかなとは思っている。だから、正副一任で、トータル的な部分も含めた、何ていうのか、これ、よかったなと思えるようなところを探してほしいなと。難しいこと、言うておるよ。

○ 荻須智之委員長

どうぞ、副委員長。

○ 豊田祥司副委員長

済みません、ありがとうございます。

ちょっと、この次第には書いてはいるんですけども、防災とか、例えばA Iとか、そういう今のシティプロモーションも含めて、いろいろな、そういう今の意見もいただきましたので、ええと……。

○ 竹野兼主委員

俺は、そういうところが必要と違うのかなと思って聞いておる。

○ 森川 慎委員

年間テーマは、人口とか、その辺がしたいんですよね。それにせなあかんと、視察はそういう意味の。

○ 竹野兼主委員

いや、違うよ。行政視察というのは、そういう意味合い、それだけにそうというのでは……。でも、最初は、そうやって言うたな。確かに委員会として。

その部分のところでの、見られるところのやつだけを探していこうとって話があったけど、それに対して、反対と違うの。

○ 樋口博己委員

正副一任でお願いします。

○ 豊田祥司副委員長

それも含めて正副一任でいただいたということで、ありがとうございます。

(発言する者あり)

○ 豊田祥司副委員長

ありがとうございます。

○ 萩須智之委員長

例えば、防災等で非常に安全なまちでということでプロモーションに生かすということもできるわけやわね。

○ 豊田祥司副委員長

防災センターとかもつくり直すとか、防災教育センター、そんな話もあるので。

(発言する者あり)

○ 竹野兼主委員

今から大学の話というのは、学生の数も減って、学生が集めるのに大変やっていって、そんなんってあるじゃない。

○ 萩須智之委員長

一旦ね、郊外へ出た大学、首都圏は、全部もう戻っています。

愛知大学ももう市内、ど真ん中、戻っている。

○ 森川 慎委員

町なかやわな。

○ 荻須智之委員長

もう町なかでないと、学生がやっぱり不便で、バイトがないというので。もう受験生が減っちゃったわけですね、田舎に出た学校は。

(「正副一任でお願いします」と呼ぶ者あり)

○ 荻須智之委員長

了解しました。ありがとうございます。

以上ですね。これで全て議事を終了させていただきます。いうことでお疲れさまでした。ありがとうございます。

16 : 15 閉議